

## 月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-24

『青のシャンソン』歌詞の意識の一部

ジュリエット・グレコ版

私は瞳を青くしてもかまわない  
どうして欲しいか話してちょうだい  
あなたのお望みのままにするわ  
十八歳だって二十歳だって三十歳だって  
なんなら白髪になってもかまわない  
お城のお姫様にだって場末の女にだって  
何でもできる私と何でもできない私  
汚れた街を売春婦のように彷徨う私  
あなたの夜をちょうだい  
あなたのベッドの傍らで眠りたい

真紀の肩口がピクッと動いた。車内には、『道化師万歳』の曲が流れていた。

「私の企みは、単なる妄想癖と言うことで一蹴されてしまったようですね」と真紀は冷やかな笑いを浮かべて言った。

「そんなことはないさ、しかし、いい歌はじっくり聴かせてもらいたい。貴女の気持ちは分からないでもないが、話の展開に多少の無理があると思う。今気づいたんだが、僕も貴女も、気持ちの伝え方にアカデミック過ぎるきらいがあるね。アカデミックと言えば聞こえはいいが、自戒の念を込めて言っているんだ。それに地口落ちは、噺家に任せておけばいいんだよ」と横田は論ずるように言った。

銀座のクラブママとして政界の重鎮や経済界の大物や各ジャンルの有名アーティストなどに鼻根にされ、長年にわたり、それ相応の体を張ってきた真紀にしてみれば、横田ごときの扱い方は然もないことのはずだが、古今東西、とかく男と女の恋愛はままならない。

またしてもロシアの文豪の登場となるが、レフ・トルストイの長編小説『アンナ・カレーナ』のストーリーは好例と言える。

帝政ロシア時代の話で、政府高官の美貌の妻と青年将校との許されぬ愛を縦糸に、農業改革に取り組む荘園主の純愛を横糸にして繰り広げられる二つの愛に対する考え方をテーマにした物語となっている。

長編にもかかわらず、プロットは平明で、一気に読み進めていける。

筆者も見習いたいと念じているのだが、なかなか思うようにはいかない。

文豪の晩年は、妻との確執に悩まされ家出した挙句に、乗り込んだ列車内で発病して、小駅の駅長室で肺炎のため死去する。

この話は、『終着駅トルストイ最後の旅』として映画化された。